

# 現在完了形の表す意味範囲の変遷と C-牽引： 英蘭語比較研究\*

和田 尚 明

## 1. はじめに

助動詞の be タイプや have タイプを用いて表す現在完了形の意味範囲の変遷 (Semantic-Range Shift) の通時的経路 (Diachronic Path) は, Bybee, Perkins & Pagliuca (1994: 105) によると, (1) のようになるという (cf. Boogaart 1999: 135)。

### (1) RESULTATIVE → ANTERIOR (PERFECT) → PERFECTIVE

RESULTATIVE とは, 「過去の行為や出来事の結果として生じた現在の状態のみを表す」段階, ANTERIOR (PERFECT) とは, 「過去に生じた状況が何らかの形で現在に関連している」段階, PERFECTIVE とは「当該状況が完結している (時間的に区切られた後の状態である)」段階のことをいう。(本稿では, 「状況」という用語を「行為」・「出来事」・「状態」などを含むカヴァータームとして用いる。) この通時的経路 (以下, 意味変遷経路として言及) は, 当該時制形式が現在時志向の時間構造から始まり, 段階的に過去時志向の時間構造を発達させてきたことを物語っている。

この点を具体例で確認してみよう。以下の (2) と (3) は, それぞれ英語とオランダ語の例である (本稿で挙げる例は, 特に断りがない限り, 現代という共時レベルの例である)。それぞれの (a) は RESULTATIVE の, (b) は ANTERIOR (PERFECT) の, (c) は PERFECTIVE の例である。英語では, 完了形は通例, 完了の have と過去分詞が並列構造になるが, RESULTATIVE の段階のみ完了の have と過去分詞の間に目的語が挟まれる枠構造になっているのに対し, オランダ語ではすべての段階において枠構造になっている点に注意されたい。<sup>1</sup>

- (2) a. I have the book bound. [RESULTATIVE]  
 b. I have bound the book. [ANTERIOR]  
 c. \*I have bound the book yesterday. [PERFECTIVE]
- (3) a. Ik heb het boek gebonden. [RESULTATIVE]  
 'I have the book bound.'  
 b. Ik heb het boek gebonden. [ANTERIOR]  
 'I have bound the book.'  
 c. Ik heb gisteren het boek gebonden. [PERFECTIVE]  
 'I bound the book yesterday.'

(a) 文は、「私は綴じられた後の状態の本をもっている」という意味を意図しており、過去において「綴じる」という行為が生じた結果の現在の本の状態を表しているという解釈が想定されているので、RESULTATIVE の意味段階を表している。(b) 文は、「私はその本を綴じた（今、その本は綴じられた状態だ）」という意味を意図しており、過去における行為とその結果生じた現在の状態の両方を表していることになるので、ANTERIOR (PERFECT) の意味段階を表している。(c) 文は、「私は特定の過去時（この場合、昨日）にその本を綴じた」という意味であり、当該状況が完結している（過去の出来事の生起が終った後の状態である）ことを表しているので、PERFECTIVE の意味段階を表している。<sup>2</sup>

ここで気がつくのは、容認されれば、英語の現在完了形が PERFECTIVE の意味段階に到達していることを示す例 (2c) が許されないのに対して、オランダ語の現在完了形の同段階への到達を示す例 (3c) は許されるという点である。この事実は、(1) の現在完了形の意味変遷経路を用いると、次のように説明可能である。すなわち、現代英語の現在完了形は ANTERIOR (PERFECT) の段階の意味までしか発達させていないのに対して、現代オランダ語の現在完了形は PERFECTIVE の段階の意味まで発達させているためという説明である。しかしながら、なぜそうなのかという問いに対しては、意味変遷経路 (1) による説明だけでは、動機付けを与えることができない。

また、この意味変遷経路による説明には、さらに、少なくとも 2 つの問題点がある。第 1 の問題点は、「過去から現在に至るまでの状態の継続」（いわゆる、英語の現在完了形の「継続用法」の表す意味）を表すのに、現代英語では現在完了形を用いなければならない、単純現在形は使えないのに対して、現代オランダ語では通例単純現在形を用いなければならない、原則として現在完了形

(4) a. I have lived in Tsukuba for ten years.  
b. \*I live in Tsukuba for ten years.

(5) a. \*Ik heb sinds tien jaar in Tsukuba gewoond.  
'I have lived in Tsukuba for ten years.'  
b. Ik woon sinds tien jaar in Tsukuba.  
'(Lit.) I live in Tsukuba for ten years.'

(6) a. ...which I have forgot to set down in my Journal yesterday.  
(1669 年からの出典)

- b. The Englishman ... has murdered young Halbert ... yesterday morning. (1820 年からの出典)

(Elsness 1997: 250)

これらの例が示すことは、中英語や近代英語において、英語の現在完了形も一旦 PERFECTIVE の意味機能をもつに至っており、現代英語において再び ANTERIOR (PERFECT) の意味段階に逆戻りしたということである。したがって、方向性を前提とする完了形の意味変遷経路 (1) では、現代という共時レベルにおいて、なぜ英語の現在完了形が ANTERIOR (PERFECT) の意味段階に逆行したのかを説明できない。

本稿の目的は、上で見た、英蘭語の現在完了形が表す意味段階の差異に対する動機付けと 2 つの問題点に対する解決策の提示を体系的かつ統一的に行うことにある。そのためには、意味変遷経路 (1) とは独立した概念として「話者意識への引き寄せ」という概念が必要であると主張する。この概念を体系的な時制理論に取り入れることで、上で見た 3 つの点をより体系的に説明できるだけでなく、完了形と (単純) 現在形に関する英語とオランダ語の時制現象の相違点のいくつかも統一的な観点から説明できると主張する。

本稿の構成は、以下のとおりである。2 節では、「話者意識への引き寄せ」とはどのような概念なのかを確認する。3 節では、Wada (2001) において提案され、その後和田 (2009) などで発展させられた時制理論の概観を、英語とオランダ語の例を用いて行う。4 節では、その時制理論に意味変遷経路と話者意識への引き寄せを取り込むことで、上で見た 3 つの点をより体系的に説明できることを論証する。5 節では、本稿のテーマを扱っている先行研究として Boogaart (1999) の分析を紹介し、本稿の分析との違いを簡単に比較検討する。6 節では、4 節で説明した時制現象と関連する時制現象に関しても、本稿の分析は統一的观点から説明できることを示す。7 節では、本稿の主張点をまとめ、その示唆するところを簡単に述べる。

## 2. 話者意識への引き寄せ

本節では、本稿の分析の鍵となる「話者意識への引き寄せ・牽引 (Gravitation toward the Consciousness of the Speaker)」(以下、「C-牽引」として言及) とはどういう概念なのかを確認する (cf. 和田 2005)。まず、本稿でいう話者

意識 (Speaker's Consciousness) についてであるが、「言語活動・認知活動を行う主体としての話者 (概念化者) の意識」と定義される (cf. Lakoff 1996, Lakoff & Johnson 1999)。この意識は、われわれが言語活動・認知活動を行っているときに活性化している脳の一部 (無意識のうちに「スイッチ・オン」の状態になっている部分) なので、その意味で、本稿でいう「話者意識」は常に話者の「ここ」と「いま」に存在すると考えられる。とりわけ、時制現象に関して言えば、話者の「いま」である発話時 (Speech Time) に話者意識は存在することになる。以下、本稿では、C-牽引を時制現象との関連のみで扱うこととする。

この点を念頭において、「話者意識への引き寄せ・牽引 (C-牽引)」が任意の言語の文法体系において、どのように発現しているのかを見ていくことにしよう。まずは、(時制現象に関する) C-牽引の定義として、(7) をご覧いただきたい。

- (7) C-牽引とは、話者意識の存在する発話時を中心とした時間帯の磁場(「現在の磁場」)へ引き寄せられる現象のことを言う。

ある言語の文法体系に対して、「話者意識」のもつ意味合いが強い場合、すなわち、「話者意識」の存在が与える影響力が強い場合、そのような言語では、話者意識が存在する発話時を中心とした時間帯、すなわち、現在時が概念的な「磁場」を形成する。そして、この「現在の磁場」への引き寄せ・牽引 (C-牽引) が反映した結果として、特定の文法現象 (すなわち、発話時に存在する話者意識志向の文法現象) が引き起こされる (具現化する) と考えるのである。

ここでいう「文法現象」には、形式選択の相違として具現する場合と意味機能上の相違として具現する場合があることに注意されたい。したがって、C-牽引には「形式選択の C-牽引 (C-Gravitation of Form Choice)」と「意味範囲の C-牽引 (C-Gravitation of Semantic Range)」の2種類が存在することになる。<sup>3</sup> しかしながら、本稿はあくまでも英蘭語の特定の時制形式 (完了形と単純現在形) の意味機能の相違の説明を目的としているので、「意味範囲の C-牽引」のみを扱うこととする。以下、特に断りがない場合、C-牽引とは「意味範囲の C-牽引」のことを指し、その内容は (8) に示されるとおりである。

- (8) 意味範囲の C- 牽引：話者意識の存在する発話時をその意味範囲に含む時制形式が、発話時を中心とした時間帯である「現在時」を焦点化した意味機能や用法を発達させている場合、意味範囲の C- 牽引が発動している。

4 節以降で、この C- 牽引という概念装置を用いて、現代における英語とオランダ語の特定の時制形式の意味機能の相違を説明することになる。

### 3. 合成的時制理論

#### 3.1. 言語（認知）主体としての話者を中心に据えた時制解釈モデル

次に、本稿の分析が依拠する時制理論を概観する。この時制理論は、Wada (2001) で提案され、その後発展を遂げてきた、言語（認知）主体としての話者の存在を中心に据えた時制解釈モデルである（cf. 和田 2009）。このモデルによる時制解釈のプロセスは、概略、(9) のように表される。

- (9) (話者) = 時制形式選択 => (聞き手) = 時制形式が表す時制解釈値の解読 => 時制解釈値の同定

話者が選択した時制形式が用いられている言語環境の特徴や文脈などの要因を考慮して、聞き手はその時制解釈値（時間値）を解読、同定していく。<sup>4</sup> 話者側から見れば、そのような聞き手側の解読過程を想定しつつ、伝達したい時制解釈値を表せる時制形式を選択することになる。

この時制解釈モデルでは、「時制形式選択とその解釈」には必ず発話時における「言語（認知）主体としての話者の関与」があるとしているので、潜在的に、話者意識への引き寄せ、すなわち、C- 牽引のような概念装置を時制現象の説明に取り込めるモデルと言える。

#### 3.2. 時制構造と時間構造

この時制理論では、各時制形式は抽象的な（スキーマティックな）時間的意味情報を示す「時制構造」をもつと仮定されている。これは、話者が時制形式選択を行う際にはこの意味情報を基にして行う、いわば文法的時間情報である。

次に、聞き手は、話者が選択した時制形式の解釈値を解読する段階において、

与えられた言語環境や文脈などを考慮しながら、その時制解釈値を同定していく。この時制解釈値には、指示時間帯(「過去」・「現在」など)や時間関係の値(「先行性」・「同時性」など)、アスペクト情報(「完了」・「未完了」など)などが含まれる。この解釈過程において、時制形式は、実際に用いられる場面において特定化される意味解釈を反映した「時間構造」を表す。ここで注意されたいのは、1つの時制形式が複数の時間構造を表すことも可能であり、いわば時間構造的に多義的になりうるという点である。別の言い方をすれば、ある時制形式の表す時間構造が異なる場合、その時制形式はそれぞれの時間構造に対応する意味機能をもつということになる。

### 3.3. 絶対時制部門・相対時制部門と時制情報

以上を念頭において、英語とオランダ語の時制形式の時制構造を見ていくことにする。本時制理論では、西欧諸語の場合、定形動詞が絶対時制形式、非定形動詞が相対時制形式となる。これは、定形動詞は絶対時制部門と相対時制部門という2つの時制部門をもつのに対し、非定形動詞は相対時制部門しかもたないからである。なぜそういうことになるのかというと、絶対時制部門は「(文法的直示要素である)人称・数・法と一体化した時制屈折辞」が関わる部門であるのに対し、相対時制部門はそれ以外の要素が関わる部門だからである。

では、定形動詞の時制構造から見ていくことにする。まず、絶対時制部門を占める「人称・数・法と一体化した時制屈折辞」が表す時制情報であるが、この部門には文法的時間帯である「時間区域 (Time-sphere)」が関与する。英語やオランダ語では、この種の時制屈折辞は現在と過去の2種類だけなので、これらの言語の定形動詞の絶対時制部門は、現在時制屈折辞が表す「現在時区域 (Present Time-sphere)」か、過去時制屈折辞が表す「過去時区域 (Past Time-sphere)」によって占められることになる。<sup>5</sup> 具体例で確認してみよう。

- (10) a. works (>work) / werkt (>werken)  
 b. worked (>work) / werkte (>werken)

(10)において、(a) が現在形、(b) が過去形の例で、それぞれスラッシュの左が英語、右がオランダ語の例である。なお、例における括弧内の>の右側にくる形式は、当該動詞の不定形であるという点に注意されたい。本稿では、(11) に示すように、現在時制屈折辞を表す形態素としては、英語では -s、オ



ランダ語では *-t* とし、過去時制屈折辞を表す形態素としては、英語では *-ed*、オランダ語では *-te* もしくは *-de* とする。

- (11) a. 現在時制屈折辞 (英語 *-s* / 蘭語 *-t*) : 「現在時区域」  
 b. 過去時制屈折辞 (英語 *-ed* / 蘭語 *-{t/d}e*) : 「過去時区域」

「現在時区域」は、文法的時間の中心点として機能する「話者の時制視点 (Speaker's Temporal Viewpoint= $V_{SPK}$ )」を含む時間帯であり、「過去時区域」は、「話者の時制視点」を含まない、あるいは、「話者の時制視点」よりも時間的に前に来る時間帯である。これらを図式化したものが、以下の図 1 である。

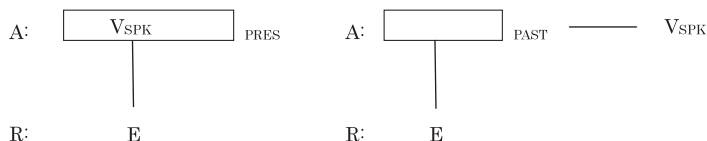


図 1 : (i) 現在形の時制構造 (ii) 過去形の時制構造

A は絶対時制部門を表し、このラインに描かれるものが絶対時制部門が担う時制情報である。PRES 付長方形は「現在時区域」を表すが、これはこの時間区域が話者の時制視点 ( $V_{SPK}$ ) を含んでいるためである。同様に、PAST 付長方形は「過去時区域」を表すが、これはこの時間区域が話者の時制視点よりも時間的に前に来ているからである。

次に、定形動詞の相対時制部門が表す時制情報を見ていく。この部門に関わるのは、定形動詞の構成要素から「人称・数・法と一体化した時制屈折辞」を除いた部分であるので、動詞語幹ということになる。例えば、(10a) の works の場合、*-s* を除いた work が表す時制情報が、相対時制部門が担う時制情報ということになる。動詞語幹は動詞の本体であり、その動詞が表す状況を描写する部分なので、それが表す時制情報は「動詞が表す状況が時間軸上において占める時点もしくは時間幅」ということになる。これは一般に出来事時 (Event Time= $E$ ) といわれているので、本理論でもそう言及することにする。この時制情報は、図 1 の R のラインに図式化されている。図 1 における出来事時と時間区域の関係についてであるが、出来事時が時間区域の中のどこかに



「当てはまる (hold)」または「生じる (occur)」ことを意図している。これは、相対時制部門がその名のとおり、絶対時制部門に従属 (依存) する時制部門だからである。

ここまででは、図 1 に図式化された定形動詞の時制構造を見てきた。これらの時制情報を基に、話者は自分が伝達したい時制解釈値を伝えることができる時制形式を選択することになる。それを受けて、聞き手側からすれば、時制解釈のプロセスに入ることになるのだが、その際、デフォルトの場合 (無標の場合) としては、話者の時制視点は発話時 (S) におかれて解釈されることになる。これは、任意の時制形式を選択した話者の (直示的) 視点は、その話者の意識 ( $C_{SPK}$ ) が当てはまっている時点と同一時点を占めるのがデフォルトだからである。本稿の枠組みでは、このデフォルトの場合、話者の時制視点は、時制形式選択後、時制解釈のプロセスにおいて、その話者の意識と融合 (結合) すると考える。上で見たように、話者の意識は発話時に存在するため、直示的視pointsの一種である話者の時制視点は、話者の意識との融合の結果、発話時におかれることになるのである。

図 2 は、現在形と過去形のデフォルトの場合の時間構造を図式化したものである (矢印は時間の流れを表す)。

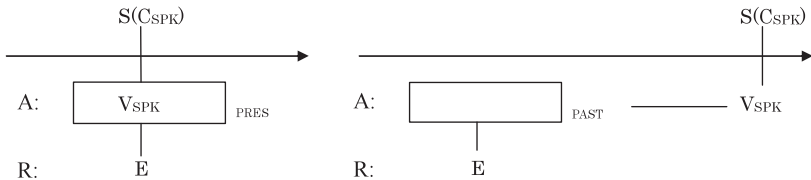


図 2：(i) 現在形の時間構造 (ii) 過去形の時間構造  
(デフォルトの場合) (デフォルトの場合)

図 2 では、文法的時間の中心点である「話者の時制視点 ( $V_{SPK}$ )」が「話者の意識 ( $C_{SPK}$ )」と融合した結果、その時制視点は概念的時間の中心点である「発話時 (S)」におかれることになるため、過去時区域が過去時領域 (Past Time-area) に、現在時区域が現在時領域 (Present Time-area) と未来時領域 (Future Time-area) に対応している。なお、現在時区域が現在時のみならず未来時にも言及できることを示す例は 6.3 節で示されるので、その時に改

めてこの点について触れることにする。また、非定形動詞の時制構造については、便宜上、次節において扱うこととする。

### 3.4. 助動詞の扱いと現在完了形の時間構造

本節では、初めに、本時制理論における助動詞の扱いについて見る。本稿の立場は、助動詞も1つの独立した出来事時を表すことができるというものである (cf. Janssen 1994, 1996; 中右 1994)。この点を、具体例で見てみよう。英語の例 (12) とオランダ語の例 (13) をご覧いただきたい。

- |      |    |                   |           |             |
|------|----|-------------------|-----------|-------------|
| (12) | a. | John may come.    | E1: may   | E2: come    |
|      | b. | Mary has come.    | E1: has   | E2: come    |
| (13) | a. | Jan kan komen.    | E1: kan   | E2: komen   |
|      |    | ‘Jan may come.’   | (>kunnen) |             |
|      | b. | Maria is gekomen. | E1: is    | E2: gekomen |
|      |    | ‘Maria has come.’ | (>zijn)   |             |

この仮説に立てば、(12a) には、法助動詞 *may* の表す出来事時 E1 と語彙動詞 *come* の表す出来事時 E2 の2つの出来事時が存在することになる。また、(12b) には、完了の *have* が表す出来事時 E1 と過去分詞の表す出来事時 E2 が存在することになる。(13) のオランダ語でも同様のことが言える。なお、英語と違ってオランダ語では、完了の助動詞が *have* タイプではなく、*be* タイプで表される場合があるが、議論の本筋にはあまり関係がないので、ここではその指摘にとどめておく。<sup>6</sup>

(12) (13) には、非定形動詞である原形不定詞や過去分詞が存在する。ここでは完了形の場合を取り上げて、非定形動詞が表す時制情報がどのように時制解釈を受けていくのかを見ることになる。すでに述べたように、非定形動詞の時制構造には、定義上、相対時制部門しか存在しない。完了形の場合に関連する非定形動詞は過去分詞であるが、その構成要素として動詞語幹以外に過去分詞マーカーである *-en* が存在する。本時制理論では、非定形マーカーは「出来事時の基準時に対する時間関係」を表すと仮定され、*-en* は出来事時の基準時に対する先行関係を表すと仮定されている。<sup>7</sup> したがって、完了形の過去分詞が完了の助動詞の補部に生じることを考慮すると、過去分詞の出来事時は完了の助動詞の出来事時を基準時とした先行関係を表すことになる。すなわち、

定形動詞である完了の助動詞の出来事時がどの時点に生じたとしても、過去分詞の出来事時はそれよりも過去に生じるという時間関係が、完了形の時間構造の内在的特性として当てはまることになる (cf. 和田 2006)。

以上の観察を踏まえると、現在完了形の時間構造の基本形は、図 3 に表されるようなものになる。

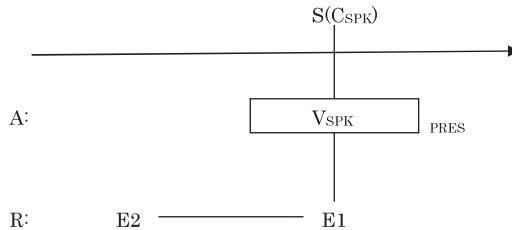


図 3：現在完了形の時間構造（基本形）

ここで基本形と呼ぶのは、過去分詞の出来事時 E2 の表す状況が生じた直接の結果状態を完了の助動詞の出来事時 E1 が表す場合、すなわち、「完了・結果用法」の場合である。

具体例で確認してみよう。英語の例 (14) とオランダ語の例 (15) をご覧いただきたい。

- (14) a. Toru has just arrived.  
 b. Yoko has gone abroad.
- (15) a. Toru is juist aangekomen.  
 ‘Toru has just arrived.’  
 b. Yoko is naar het buitenland gegaan.<sup>8</sup>  
 ‘Yoko has gone abroad.’

(15a) では、is が完了の助動詞 zijn ‘be’ の 3 人称・単数・現在形であり、aangekomen ‘arrived’ が過去分詞である。(15b) では、同じく is が完了の助動詞で、gegaan ‘gone’ が過去分詞である。(14) (15) とともに、(a) では、E2 は「徹が到着する」という状況の出来事時を、E1 は「徹が到着した場所にいる」という結果状態の出来事時を表す。同様に (b) では、E2 は「陽子が海外へ行く」

という状況の出来事時であり、E1は「陽子は今日本にいない」という結果状態の出来事時を表す。

いまや、説明に必要な道具立てが揃ったので、次節では具体的な分析に移ることにする。

## 4. 説明

### 4.1. 3つの意味段階の時間構造

まず、(1) で見た現在完了形の意味変遷経路の3つの意味段階を、われわれの枠組みで図式化するとどうなるのかを見てみることにする。初めに、RESULTATIVEの段階を考察する。この意味段階の英語の例は(2a)、オランダ語の例は(3a)であったが、便宜上、もう一度以下に掲載する。

(2a) I have the book bound. (英)

(3a) Ik heb het boek gebonden. (蘭)

これらの文の意味は、ともに、「発話時において綴じられた状態の本をもっている」という状況を意図していたのであった。この意味情報を反映した時間構造を図式化すると、図4のようになる。<sup>9</sup>

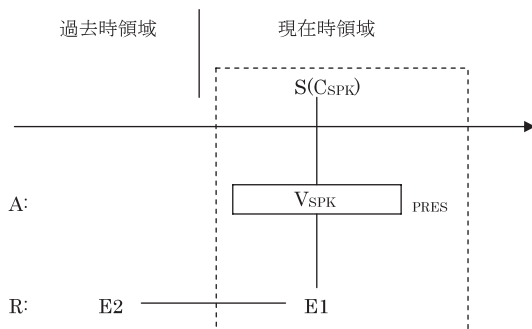


図4：RESULTATIVEの時間構造

本稿では独立節に生じる場合を考察対象としているので、デフォルトの場合ということになり、話者の時制視点 ( $V_{SPK}$ ) は、話者の意識 ( $C_{SPK}$ ) との融合の

結果、発話時 (S) におかれる。E1 は定形動詞 have が表す出来事時で、「本を綴じた後の状態」が当てはまる時点を目指す。ここで注意すべきは、「本を綴じる」という行為そのものが生じた時点である E2 は、RESULTATIVE の時制解釈には直接関わらないということである。図 4 において、破線で囲まれた部分は解釈の前景部分を指し、当該時間構造においては、この中の要素のみが時制解釈に直接影響を与えること（直接関与すること）を意味する。<sup>10</sup>

次に、ANTERIOR (PERFECT) の段階を見てみよう。この意味段階の例として、英語の (2b) とオランダ語の (3b) を以下に再掲載する。

(2b) I have bound the book. (英)

(3b) Ik heb het boek gebonden. (蘭)

これらの文は、「過去に本を綴じる」という行為が成立し、その結果状態である「本が綴じられた状態」が現在に当てはまっている、という「現在時との関連性 (Current Relevance)」の解釈を表すのであった。この意味情報を反映した時間構造を図式化すると、図 5 のようになる。

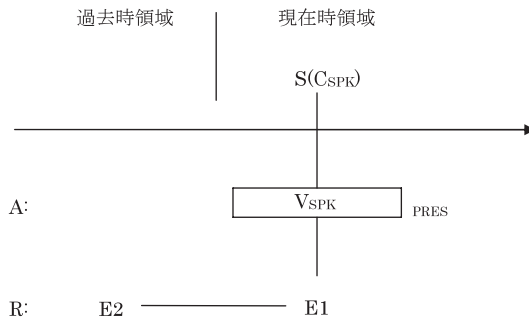


図 5：現在完了形の時間構造 ([ANTERIOR (PERFECT)])

この図式と RESULTATIVE の意味段階の図式との大きな違いは、この段階の表す意味機能では、解釈の前景部分に過去時に属する要素である E2 も関わっているという点である。これは、この段階の表す意味情報が、「任意の状況が過去時に生じた結果、現在時に影響を与えている」状態だからである。なお、図 4 と違って図 5 では、時間構造の中に破線で囲まれている部分がないが、

その場合は、時間構造のすべての構成部分が時制解釈の前景部分となることを示している。

最後に、PERFECTIVE の段階の時間構造を見てみよう。この意味段階の例は、(2c) (3c) であった。便宜上、もう一度以下に掲載する。

(2c) \*I have bound the book yesterday. (英)

(3c) Ik heb gisteren het boek gebonden. (蘭)

これらの文は、「昨日という特定の過去時に本を綴じるという行為が完結した」という意味を表し、発話時における結果状態は解釈の前面には出てこないのであった。すなわち、「現在時との関連性」は希薄化している状態である。この意味情報を反映した時間構造を図式化すると、図6のようになる。

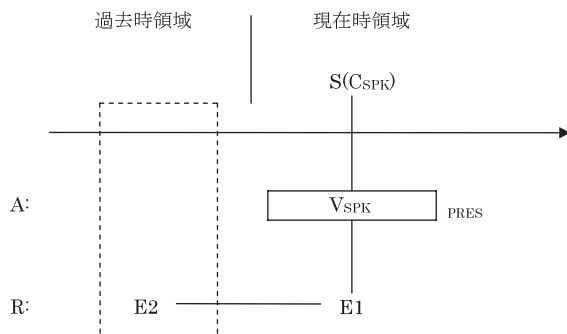


図6：現在完了形の時間構造（「過去時制相当」用法＝[PERFECTIVE]）

図6は、この意味段階では、解釈の前景部分が過去時に生じる部分のみであるため、現在時に属する要素は時制解釈には直接関わらない、ということを表している。ここでは、時制解釈に直接関わる部分であるE2が過去時領域に属しているので、この意味段階の現在完了形は「過去時制相当」用法をもつことができる。

1節で見たように、意味変遷経路(1)に基づけば、英語の現在完了形はこの意味段階までは達していないので、(2c)は非文であるが、オランダ語の現在完了形はこの意味段階にまで達しているため、(3c)は文法的であるという

説明が可能であった。この説明をわれわれの時間構造に基づいて言い換えると、PERFECTIVE の意味機能を表す時間構造をもつオランダ語の現在完了形は、gisteren ‘yesterday’ という過去時を指す表現と共起可能であるが、この意味機能を表す時間構造をもたない（現代）英語の現在完了形は、yesterday とは共起不可能である、ということになる。

#### 4.2. C-牽引による説明 (1)：PERFECTIVE の意味機能の有無

しかしながら、現代という共時レベルにおいて、なぜオランダ語の現在完了形は PERFECTIVE の意味機能を有するのに、英語の現在完了形にはないのか、という疑問に対しては、意味変遷経路のみによる説明では動機付けを与えることができなかった。これに対する答えを与えてくれるのが、2 節で見た「話者意識への引き寄せ (C-牽引)」という概念である。現代という共時レベルにおいては、英語のほうがオランダ語に比べて、C-牽引の度合いが高いと仮定してみよう。これは、「話者意識」の存在が文法体系に与える影響力がオランダ語よりも英語のほうが強いと仮定すると、その結果として、英語のほうがオランダ語よりも「現在時の磁場」が強いということになるためである。したがって、英語の現在完了形においては、現在時に属する要素が解釈の前景部分からなくなるような時間構造、すなわち、図 6 で表された PERFECTIVE の意味機能（「過去時制相当」用法）の時間構造は許されない、と説明できる。一方のオランダ語のほうは、「現在時の磁場」があまり強くないため、現在時に属する要素が解釈の背景部分になるような時間構造、すなわち、PERFECTIVE の意味機能も許される、と説明できる。<sup>11</sup>

#### 4.3. C-牽引による説明 (2)：「継続用法」の問題

次に、現在完了形の「継続用法」が他の（より過去時志向の強い）用法（「完了・結果用法」と「経験用法」）よりも時代的に後になって生じてきた問題に移る。まず、もう一度論点を確認しておこう。完了形の意味変遷経路 (1) は、意味範囲が現在時志向から過去時志向への段階的変遷を表すものであった。それに対して、歴史的事実として、英語では ANTERIOR (PERFECT) の意味段階の後の方で、再び現在時志向性の強い「継続用法」が生じてきたのであった。したがって、少なくとも、完了形の意味変遷経路 (1) そのものではこの歴史的事実を説明できない、というのが問題点であった。

われわれの枠組みでは、この完了形の意味変遷経路が示す「過去時志向への



変遷」とは別のメカニズムとして、C-牽引が働いていると仮定している。英語では、「現在の磁場」が強力であるためにC-牽引度が高いということになり、そのため、現在時をその意味範囲内にもつ時制形式では、過去時に属する要素の「現在の磁場」への引き寄せが起こってきたのである。

この点を、具体例に基づいて説明していく。英語の例(4a)を、今一度ご覧いただきたい。

(4a) I have lived in Tsukuba for ten years.

この文は「10年前の過去から現在に至るまでつくばに住んでいる」という意味であり、「継続用法」の例であった。英語の現在完了形の「継続用法」の時間構造と「現在の磁場」の関係は、図7のように図式化される。

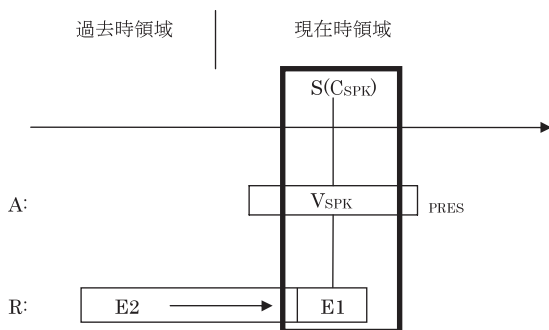


図7：英語の現在完了形の「継続用法」の時間構造と「現在の磁場」

この図で、太字実線で囲まれている部分は強い「現在の磁場」を表す。Rラインの長方形内にある矢印は、C-牽引によって、E2が「現在の磁場」へ引き寄せられていることを示している。<sup>12</sup> (4a) で言えば、「つくばに住んでいる」という（過去時に属する）状態の出来事時が、「現在の磁場」に引き寄せられた結果、現在の状態（これも、つくばに住んでいる）にまで至りついており、その結果、過去時の状態の出来事時E2が現在の状態の出来事時E1と融合し、過去時から現在時へと同じ状態が続く「継続用法」となる、と説明できる。

一方、オランダ語ではC-牽引の度合いが（相対的に）低いということは、「現在の磁場」は弱いということである。したがって、現在時をその意味範囲内

にもつ時制形式において、過去時に属する要素を「現在の磁場」へ引き寄せる力は弱い。オランダ語の現在完了形の「継続用法」の時間構造と「現在の磁場」の関係は、図 8 のように図式化される。

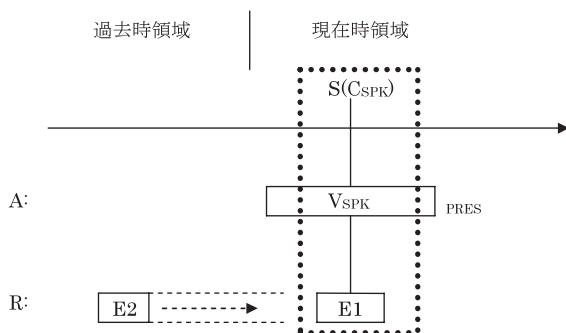


図 8：オランダ語の現在完了形の「継続用法」の時間構造と「現在の磁場」

太字点線で囲まれている部分は「現在の磁場」の力が弱いこと、あるいは、不十分であることを示す。R ラインにある破線矢印は、C-牽引の度合いが低く、破線の未完成の長方形は E2 の E1 への引き寄せが不十分（不成立）であることを示す。

これにより、オランダ語の現在完了形は、時間構造的には、「継続用法」を表すことは不可能であるという予測が成り立つ。事実、(5a) が示すように、過去時から現在時へ同じ状態が継続する状況（「継続用法」）は、オランダ語では現在完了形で表さない。

(5a) \*Ik heb sinds tien jaar in Tsukuba gewoond.

‘I have lived in Tsukuba for ten years.’

しかしながら、(16) の例は、一見、本稿の説明に対する反例のように思える。なぜなら、現在完了形で「継続用法」を表しているように思えるからである。

(16) Ik heb nu tien jaar in Tsukuba gewoond. (Dus/Maar nu is het tijd dat ik naar een andere stad verhuis.)



在時の磁場」が強いため、英語の現在完了形においては、現在時に属する要素 E1 が解釈の前景部分から外れ、過去時に属する要素 E2 のみが解釈の前景部分になるような時間構造、すなわち、図 6 で表された PERFECTIVE の時間構造は許されない。したがって、意味変遷経路 (1) の意味段階で見れば、ANTERIOR (PERFECT) の段階しか、現代英語の現在完了形は表せないということになる。以上の説明を図式化すると、以下ようになる。

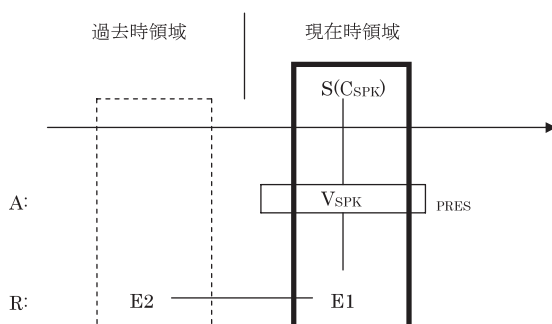


図 6-2：現在完了形の時間構造（「過去時制相当」用法＝[PERFECTIVE]）と「現在時の磁場」

#### 4.5. 「過去時から現在時へ続く状態の継続」と単純現在形

ここまで見てきた中で、残された問題として、「過去時から現在時へ続く状態の継続」は、英語では単純現在形では表せないのに対し、オランダ語では通例単純現在形で表すのはなぜか、という点がある。まずは、具体例をご覧ください。

(17) \*I live in Tsukuba for ten years. (=4b)

(18) Ik woon sinds tien jaar in Tsukuba. (=5b)

‘(Lit.) I live in Tsukuba for ten years.’

「10 年前から現在までつくばに住んでいる」という過去時から現在時まで継続している状況を表すのに、(17) が示すように英語では単純現在形は使えないが、(18) が示すようにオランダ語では使える（通例、単純現在形を使う）。

この現象も、英語では C-牽引が強いのにに対してオランダ語では弱い、とす

るわれわれの仮説で以って統一的に説明できる。まず、単純現在形も現在時をその意味範囲に含むことから、C-牽引が発動する時制形式と言える。この点を念頭において、図9と図10をご覧ください。

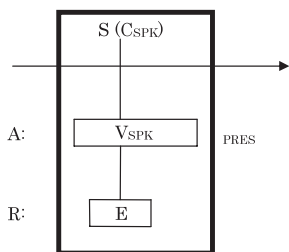


図9：英語の単純現在形の時間構造と「現在時の磁場」

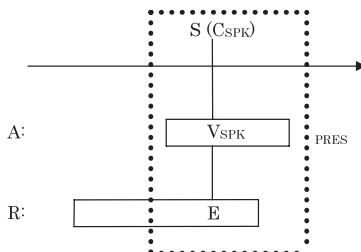


図10：オランダ語の単純現在形の時間構造と「現在時の磁場」

図9は、英語の単純現在形の時間構造と「現在時の磁場」の関係を図式化したもので、図10は、オランダ語の単純現在形の時間構造と「現在時の磁場」の関係を図式化したものである。

図9において、単純現在形の出来事時（E）は「現在時の磁場」内に留まっている。これは、現代英語ではC-牽引の度合いが高いため、出来事時の言及範囲は「現在時の磁場」内に制限されるため、とすることができる。いわば、「現在時の磁場」がバリアとなって出来事時Eが過去時へ拡張していくのを妨げていると考えられる。

一方、図10では、単純現在形の出来事時は「現在時の磁場」を超えて、過去時へと言及範囲が拡張している（ただし、主観的には現在時領域が過去時方向へ拡張していると捉える）。これは、現代オランダ語ではC-牽引の度合いが低く、その結果、出来事時の言及範囲は「現在時の磁場」内に制限されないため、とすることができる。<sup>13</sup>

以上から、現代英語ではC-牽引度が高いため、かつては存在していた単純現在形による「過去から現在に至る状況」を表す用法は衰退したが、現代オランダ語ではC-牽引度が低いため、単純現在形で以ってこの「過去から現在に至る状況」を表すことができる、と説明できるのである。<sup>14</sup>この現象は、両言語における現在完了形の「継続用法」の有無に関する相違と表裏一体の関係にある。

#### 4.6. まとめ

ここまで、英語とオランダ語の現在完了形の違いについて、C-牽引の度合いの違いから説明してきた。意味変遷経路 (1) 以外に C-牽引という概念を導入し、その度合いが英蘭語で異なると仮定することで、以下の4点が統一的かつ体系的に説明できた。(i) 意味変遷経路に基づいて説明した場合、英語の現在完了形の表す意味範囲は PERFECTIVE の段階にまで達していないのに、オランダ語では達しているのはなぜかが疑問として生じるが、それに対しては、現代英語では C-牽引度が高いためと説明した。(ii) 現在完了形の「継続用法」が「完了・結果用法」や「経験用法」よりも時代的に後に出てきたのは、意味変遷経路とは別に、C-牽引の発動の影響を受けたためと説明した。(iii) 英語の現在完了形が一旦 PERFECTIVE の段階にまで達したのに、現代という共時レベルでは再び ANTERIOR (PERFECT) の段階に後戻りしたのは、現代英語では C-牽引の度合いが高いためと説明した。(iv) 「過去時から現在時へと続く状態」を表すのに、英語では単純現在形が使えないのに対し、オランダ語では通例単純現在形を使うのは、C-牽引度の高い英語では現在時に当てはまる出来事時が「現在時の磁場」のバリア内に閉じ込められて、過去時にまで拡張していかないからと説明した。

現代英蘭語の C-牽引の度合いと意味変遷経路の段階の関係を表にまとめると、表 1 のようになる。

表 1：英蘭語の現在完了形に関する C-牽引の度合いと意味変遷経路における段階

	C-牽引度の高さ	現在完了形の意味変遷経路における段階
英 語	高	ANTERIOR (PERFECT)
オランダ語	低	PERFECTIVE

英語に関して言えば、現代という共時レベルにおいて C-牽引度が急激に高くなったため、現在完了形と単純現在形の表す意味範囲の中の発話時を中心とした現在時部分が焦点化することになった。これが、歴史的な流れの中で、現在完了形が表す意味段階の ANTERIOR (PERFECT) 段階への後退、現在完了形の「継続用法」の発達と維持、単純現在形の「過去から現在へ至る状態の継続」の意味の衰退を連動させる形でもたらしたと思われる。

## 5. 先行研究との比較

前節では、「話者意識への引き寄せ (C- 牽引)」という概念を、和田の一連の研究 (Wada 2001, 和田 2009, など) で説明の基盤に据えられている合成的時制理論に取り入れることで、完了形の意味変遷経路 (1) だけでは説明できなかった論点を統一的に説明できることを見た。本節では、本稿のテーマを体系的に扱っている先行研究について取り上げ、本稿の分析との比較を簡単に行いたい。筆者の知る限り、本稿の論点を取り上げて英蘭語の時制現象の比較研究を体系的に行っている論考は、Boogaart (1999) しかない。したがって、本節では Boogaart (1999) の分析を紹介し、本稿の分析との比較検討を簡単に行うことにする。

Boogaart (1999) も、英語の現在完了形は ANTERIOR (PERFECT) の意味段階を、オランダ語の現在完了形は PERFECTIVE の意味段階を表すとする点では、Bybee, Perkins & Pagliuca (1994) や本稿の主張と同じである。ただ彼の主張は、意味変遷経路における各意味段階への変遷は段階的であり、各意味段階内でも到達度に差異があるとする点が特徴的である。具体的には、英語の現在完了形は ANTERIOR (PERFECT) の意味段階の中でも RESULTATIVE に近い位置を占めるのに対して、オランダ語の現在完了形は PERFECTIVE の意味段階に達してはいるものの、ドイツ語の現在完了形やフランス語の複合過去形に比べれば、ANTERIOR (PERFECT) に近い位置を占めていると主張している (Boogaart 1999: 156)。各意味段階の中にも到達段階に差異があるという主張自体は筆者も賛成である (事実、和田 2008 は、C- 牽引度の差異という形を取ってはいるが、同様の主旨の主張を行っている)。

Boogaart (1999) は、まず、「英語の現在完了形は ANTERIOR (PERFECT) の意味段階の中でも RESULTATIVE より位置を占めるのに対して、オランダ語の現在完了形はこの意味段階を完全にカバーしている」という主張を支える根拠として、次の 4 つの言語的特徴に関する両形式の振る舞いの相違を挙げている。



(19)

	言 語 的 特 徴	英語の現・完	蘭語の現・完
1	[+telic]& 結果状態が発話時に当てはまる	○	○
2	[-telic]& 「継続用法」	○	○
3	[+telic]& 結果状態が発話時に当てはまらない	×	○
4	過去の定時点を指す表現との共起	×	○

○は当該言語的特徴をもつことを、×はもたないことを示す。言語的特徴3に対する英蘭語の現在完了形(現・完)の振る舞いの相違を示す例は、(20)である。言語的特徴4の相違を示す例は、(2c) (3c) である。

- (20) a. ?He has left, but he has come back later. (Boogaart 1999: 139)  
 b. John is weggegaan en daarna weer teruggekomen.  
 ‘(Lit.) John has left and has come back again later.’  
 (Boogaart 1999: 143)

(20b) のオランダ語の例では、最初の出来事(「ジョンの出発」)の結果状態(「ジョンがその場にはいないこと」)が(2つ目の出来事でキャンセルされているので)発話時において当てはまっていないことを示すが、これはオランダ語の現在完了形が(19)の言語的特徴3を有することを示している。一方、(20a)の英語の例の容認度が低いのは、英語の現在完了形の場合、結果状態が発話時において当てはまっているのを含意するため、最初の出来事の結果状態と2つ目の出来事(「ジョンの帰宅」)が矛盾するからと説明できる。

次に、オランダ語の現在完了形が PERFECTIVE の意味段階の中で、ANTERIOR (PERFECT) よりの位置を占めるとする主な根拠の1つとして、Boogaart (1999) は、現在完了形と単純過去形が表すニュアンスの違いを指摘している。

- (21) a. Hij is weggegaan en later weer teruggekomen.  
 ‘(Lit.) He has left and has come back later.’  
 (Boogaart 1999: 158)  
 b. Hij ging weg en kwam later weer terug.  
 ‘He left and came back later.’  
 (Boogaart 1999: 158)

Boogaart (1999) によれば, (21a) の現在完了形の例では, 2つの出来事が各々発話時から評価されているニュアンスを表し, 発話時を完全に消し去る (Bracketing) ことができないので, その意味では「現在時との関連性」が完全になくなっているわけではなく, したがって, オランダ語の現在完了形は完全に PERFECTIVE の意味段階に達しきれていないという。

オランダ語の現在完了形が PERFECTIVE の意味段階のどの程度まで達しているかについては, 現段階では筆者も特に批判すべき証拠をもち合わせていない。ただ, 英語の現在完了形の ANTERIOR (PERFECT) の意味段階内の到達度に対する論拠を示す (19) については, 主に3点コメントがある。まず, 言語的特徴2についてであるが, Boogaart (1999) は, オランダ語の現在完了形には「継続用法」があるとしているが, 彼が根拠としているのは (16) のような *nu* ‘now’ が付いたタイプの例であり, なぜ (5a) の *sinds* ‘since’ タイプの現在完了形の「継続用法」は許されないのかを説明できない。

次に, 言語的特徴4についてである。Boogaart (1999) は, 特定の過去時を指す表現との共起性を PERFECTIVE の意味段階を示す根拠ではなく, ANTERIOR (PERFECT) の意味段階を示す特徴であると捉えているようであるが, すでに見たように Bybee, Perkins & Pagliuca (1994) の捉え方とは異なる (注2を参照)。その上, 彼の主張の根拠として取り上げている Nedjalkov & Jaxontov (1988: 16) の “In many languages (though not all; cf. English, Norwegian) the perfect form can take an adverbial of time indicating the moment at which the action took place (e.g., *at 7 o'clock in the morning*)” という引用であるが (Boogaart 1999: 152), これは RESULTATIVE 構文との関係から完了形という形式の特徴を述べているのであって, ANTERIOR (PERFECT) の意味段階の特徴を述べていることにはならない。

最後に, Boogaart (1999: 151) 自身が認めるように, 彼の分析ではなぜ英語の単純現在形が「過去時から現在時へと続く継続状態」を表せないのか (例: (4b)) を説明できない (英語では, 現在完了形がそれを表すように慣習化していると述べているだけである)。本稿の分析では, 4節で見たように, これら3点に対しても統一的な観点から一定の説明を与えられることを付け加えておきたい。

## 6. 関連する時制現象

この節では、本稿の C-牽引による時制現象の説明の有効性をさらに確かめるため、関連する他の時制現象への適用可能性を見ることにする。

### 6.1. 過去完了形

まずは、英語とオランダ語の過去完了形から見ていく。よく言われるように、英語の過去完了形には、現在完了形を過去ヘシフトさせた「過去の完了」の意味と、過去形をさらに過去ヘシフトさせた「過去の過去」の意味がある。それぞれの意味の例が (22) と (23) である。

(22) John had already left when Mary arrived. (過去の完了)

(23) The clock struck twelve; John had already departed at ten o'clock.  
(過去の過去) (Comrie 1985: 66)

英語の場合、「過去の完了」は、現在完了形がもつ時間構造に対応する意味機能であり、完了形の意味変遷経路 (1) で言えば、ANTERIOR (PERFECT) の意味機能の過去版を表すと言える。一方、「過去の過去」は、「過去時制相当」用法である PERFECTIVE の意味機能の過去版を表す時間構造をもつと言える。

オランダ語の過去完了形にも、この 2 つに相当する意味機能がある。((24) は英語の (22) に、(25) は英語の (23) に対応するオランダ語である。)

(24) Jan was al vertrokken toen Maria kwam aan. (過去の完了)  
'Jan had already left when Maria arrived.'

(25) De klok sloeg twaalf uur. Jan was al vertrokken om tien uur.  
(過去の過去)

'The clock struck twelve. Jan had already left at ten o'clock.'

したがって、過去完了形に関して言えば、英語もオランダ語もともに ANTERIOR (PERFECT) と PERFECTIVE に対応する時間構造をもつことになる。

ここで説明すべきポイントは、「なぜ現代英語では、現在完了形は

ANTERIOR (PERFECT) の意味機能を表す時間構造しかもたないのに、過去完了形は PERFECTIVE の意味機能に対応する時間構造をもつのか」という点である。C-牽引という概念を援用することで、この点も統一的に説明できることを、以下で見ていく。

はじめに、図 11 をご覧いただきたい。

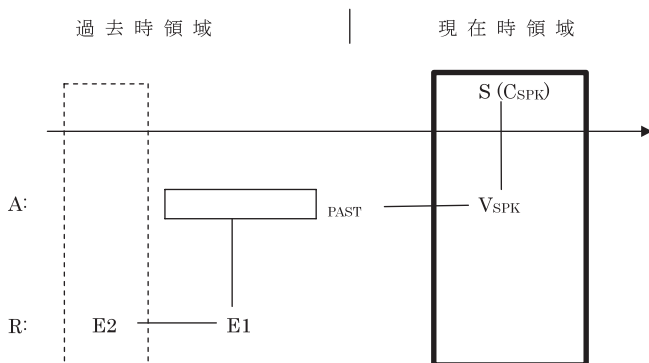


図 11：英語の過去完了形（「過去の過去」）の時間構造と「現在時の磁場」

この図式は、英語の過去完了形の「過去の過去」、すなわち、PERFECTIVE の意味機能に対応する時間構造を表している。この図から分かるように、過去完了形の意味構造を構成する「過去時区域」ならびに 2 つの出来事時 E1 と E2 はすべて過去時に属する要素であり、「現在時の磁場」の影響下にはない。なぜなら、過去完了形は話者意識の存在する発話時をその意味範囲に含む時制形式ではなく、したがって、C-牽引が発動する対象ではないからである。以上から、英語の過去完了形に PERFECTIVE の意味機能に対応する時間構造があるのは、この時制形式の場合には C-牽引が発動しないため、と説明できる。

同じことが、オランダ語についても言える。過去完了形の場合、問題となる意味範囲は「現在時の磁場」の影響下にはないので、「現在時の磁場」の強弱は関係しないからである。したがって、過去完了形の場合、C-牽引が発動しないため、英語とオランダ語の間に現在完了形のときに見られた差異が生じないと説明できる。

## 6.2. 非定形の完了形

次に、定形補部に生じる非定形の完了形について考察する。この完了形は過去形の代用形として振る舞うことがあるとよく言われるが、本稿の言葉で言うところ、「過去時制相当」用法、すなわち、PERFECTIVE の意味機能に対応する時間構造をもつということになる。この用法の例として、英語の例 (26) とオランダ語の例 (27) を、まずはご覧いただきたい。

- (26) a. John may have arrived yesterday.  
       b. Mary must have arrived yesterday.  
 (27) a. Jan kan gisteren aangekomen zijn.  
       ‘Jan possibly arrived yesterday.’  
       b. Maria moest gisteren aangekomen zijn.  
       ‘Maria surely arrived yesterday.’

(a) 文、(b) 文ともに、「過去時に主語が表す人物が到着した」ことに対する推量を現在時に行っていることを表す。ここで注意されたいのは、今まで見てきた現在完了形や過去完了形の場合と違って、定形補部に生じる非定形の完了形をもつ文では、基本的に出来事時が3つになるという点である。定形動詞である法助動詞の出来事時 E1、完了の助動詞の出来事時 E2、そして、過去分詞の出来事時 E3 である。(26a) で言えば、E1 は may, E2 は have, E3 は arrived となり、(27a) で言えば、E1 は kan ‘can’, E2 は zijn ‘be’, E3 は aangekomen ‘arrived’ となる。<sup>15</sup>

非定形の完了形では、完了の助動詞は定形動詞ではないので、完了形自体は絶対時制部門をその時制構造にもたない。したがって、非定形の完了形の時制構造自体は、話者の時制視点を含まないので、話者の意識との融合もなく、話者意識と直接関係しない時制情報しかもたないと言える。話者意識と直接関係する時制情報を有するのは、あくまでも定形動詞である。したがって、例えば、(26a) では、定形動詞である法助動詞 may の時制構造には絶対時制部門があり、それが表す時制情報を構成する話者の時制視点が発話時にある話者意識と融合し（独立節に生じているので、デフォルトの場合である）、その結果、話者意識の影響力が及ぶ「現在時の磁場」は、定形動詞の時間構造内に留まると仮定できる。したがって、非定形の完了形自体の時間構造は「現在時の磁場」の影響を受けず、それゆえ、現在時に属する要素である have や hebben (zijn) の

出来事時が解釈の前景部分にならないような解釈，すなわち，PERFECTIVEの意味機能の解釈も許す，という説明が可能となる。いわば，オランダ語の現在完了形の場合の時間構造と「現在時の磁場」の関係と同じであり，したがって，「過去時制相当」用法である PERFECTIVE の意味機能も表せるのである。以上を踏まえて，定形動詞である法助動詞の補部に非定形の完了形が生じる文の時間構造を図式化すると，図 12 のようになる。

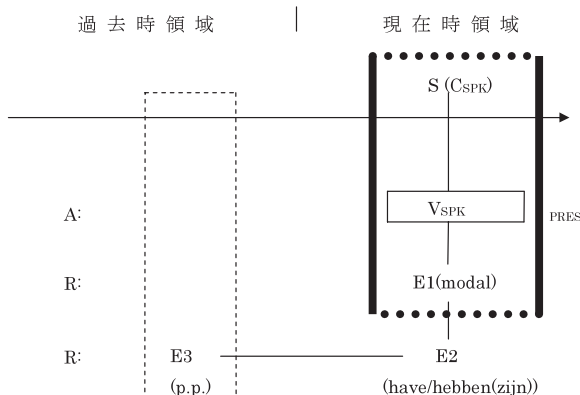


図 12：英蘭語の定形補部に生じる非定形の完了形の時間構造と「現在時の磁場」

図 12 において「現在時の磁場」を表す太線長方形は実線と点線で形成されているが，これは実線の場合は英語の，点線の場合はオランダ語の「現在時の磁場」であることを意味している。

ここでの主張に関して，完了の助動詞 have の出来事時 E2 も現在時に当てはまるのに，なぜ「現在時の磁場」に入らないのか，という疑問が生じてくると思われる。しかしながら，2 節の定義から分かるように，本稿では現在時に当てはまる出来事時がすべて「現在時の磁場」に入るとは言っていない。「現在時の磁場」は，あくまでも，話者意識の影響力が及ぶ範囲であり（話者意識は発話時に存在するので，その影響力が及ぶ時間帯が現在時であることは確かなのだが），この場合の完了形はそれ自体話者意識と直接の関係を表さない時間構造しかもたない以上，その時間構造は「現在時の磁場」の外にあるということになるのである。

このような説明は，例えば 4 節で I have lived in Tsukuba for ten years の

ような現在完了形の「継続用法」の発達を説明する際、非定形動詞である過去分詞の出来事時 E2 が「現在時の磁場」に引き寄せられた結果、完了の助動詞の出来事時 E1 と融合し、過去時から現在時へと続く状態を表せるようになったという説明をしているので、一見すると矛盾するように思えるかもしれない。なぜなら、定形補部に非定形の完了形が生じる場合には、なぜ（原形不定詞としての）完了の助動詞の出来事時 E2 が法助動詞の出来事時 E1 を含む「現在時の磁場」に引き寄せられないのかということが問題となってくるからである。

しかしながら、完了形 (have/hebben (zijn) + 過去分詞) 自体は 1 つの時制ユニットを形成するのに対し、法助動詞とその補部に生じる原形不定詞（ここでは完了の助動詞）は時制ユニットを形成していない、という直感がある。時制ユニットとは、複数の要素が合体して 1 つの固定した時間関係を表すユニットのことである (cf. Wada 2001)。この直感は、言語事実によっても正当化される。(26) (27) と (28) (29) を比較されたい。

(28) John may have left when Mary arrives tomorrow.

(29) Jan kan al vertrokken zijn als Maria morgen aankomt.

‘Jan {can/may} have left when Maria arrives tomorrow.’

われわれの枠組みでは、(28) (29) の完了の助動詞 have/zijn ‘be’ が表す出来事時 E2 は未来時に当てはまるので、法助動詞 may/kan ‘can’ の出来事時 E1 との時間関係は後続関係である。一方、(26) (27) では、完了の助動詞の出来事時 E2 と法助動詞の出来事時 E1 の時間関係は同時関係であった。したがって、定形動詞である法助動詞とその補部に生じる原形不定詞である完了の助動詞は、定義上、時制ユニットを形成していない。対照的に、完了形の場合、完了の助動詞の出来事時と過去分詞の出来事時との時間関係は、完了の助動詞が定形位置に生じても (cf. (2) (3)), 非定形位置に生じても (cf. (26) (27) (28) (29)), 必ず先行関係である。したがって、定義上、時制ユニットと言うことが出来るのである。

以上から、非定形の完了形が PERFECTIVE の意味機能を表す時間構造をもつことに対しても、C-牽引を用いると統一的に説明可能であることが分かった。<sup>16</sup>



### 6.3. 単純現在形による「未来時指示」

最後に、英語とオランダ語の単純現在形による「未来時指示」について考察する。<sup>17</sup> まず、両言語ともに、単純現在形で未来時指示が可能であることは、以下の例によって示される。

(30) The Orient Express leaves at 7:30 tomorrow.

(31) De Orient Express vertrekt morgen om 7:30.

‘The Orient Express leaves at 7:30 tomorrow.’

このことは、3.3 節で触れた、デフォルトの場合、現在時区域は現在時だけでなく未来時にも言及できるという主張を裏付ける。(30) で言えば、現在形 leaves の時制構造がもつ「現在時区域」内に生じる出来事時が未来時に当てはまっていることになるからである。

しかしながら、一方で、現代という共時レベルでは、オランダ語に比べて英語のほうが単純現在形で未来時を指すのに厳しい制限があるという事実もある。例えば、未来時における天候の予測をする場合、英語では単純現在形が使えない。

(32) \*It rains tomorrow.

(33) Het regent morgen. (Cf. Morgen regent het.)

‘(Lit.) It rains tomorrow.’

この事実も、C- 牽引という概念を援用することで説明が可能である。

まず、単純現在形で未来時指示を行う場合、どのようなニュアンスがあるのかを考察してみよう。will や zullen ‘will/shall’ を用いる場合と違って、未来の状況をあたかも事実であるかのように「断定」する場合には、単純現在形を用いると言える。<sup>18</sup> 未だ実現していない未来の出来事を「断定」するには、話者にとってそれなりの根拠がないと無理である。したがって、(30) (31) が示すように、時刻表やあらかじめ決められた計画などに基づく発話の場合には、「断定」するだけの客観的な根拠があると考えられるので、単純現在形による未来時指示が可能なのである (cf. Leech 1987/2004)。

では、なぜ未来における天候の予測の場合に、オランダ語では単純現在形が使えるのに英語では不可能なのだろうか。これは、別の言い方をすれば、主観

的な根拠に基づく単純現在形による未来時指示については、英語のほうが制約を強く受けるということになる。この理由は、英語のほうがオランダ語に比べて C-牽引の度合いが高いため、単純現在形の表す出来事時は、特別な理由がない限り(例えば、「断定」できるだけの客観的根拠がない限り)、「現在の磁場」内に留まろうとする力が働き、その結果、主観的な根拠に基づく場合は、単純現在形による未来時指示は通例できない、と説明できる。一方のオランダ語のほうは、C-牽引の度合いが低いため、単純現在形の出来事時が「現在の磁場」内に留まろうとする力は弱く、したがって、話者が主観的であれ断定できる根拠をもっているならば、単純現在形で以って未来時指示ができると説明できる。

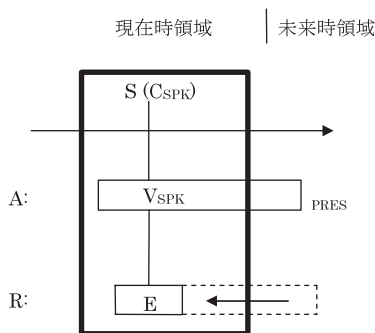


図 13：英語の単純現在形の未来時指示用法の時間構造と「現在の磁場」

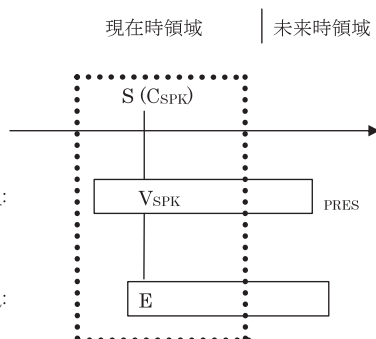


図 14：オランダ語の単純現在形の未来時指示用法の時間構造と「現在の磁場」

図 13 は、英語の単純現在形は、その意味範囲が「現在の磁場」に引き寄せられていることを表す。なお、破線の長方形は、当該出来事時によって表される時間範囲として限定的にのみ許されることを示す。また、矢印は「現在の磁場」への引き寄せを表す。図 14 は、オランダ語の単純現在形は、その意味範囲において「現在の磁場」への引き寄せが弱いことを示し、当該出来事時の指す時間範囲は必ずしも「現在の磁場」内に留まる必要がないことを示す。

以上から、英語では C-牽引の度合いが高いため、単純現在形による未来時指示には厳しい制約があり、未来の状況に言及するには、通例、will を用いて「予測」することになると言える。<sup>19</sup> 一方、C-牽引度の低いオランダ語には、そのような制約はないと言える。

## 7. おわりに

本稿では、完了形の意味変遷経路 (1) に加えて、C・牽引という概念を用いることで、以下の 6 点を統一的な観点から説明できることを見てきた。

- (i) なぜ現代という共時レベルにおいて、英語の現在完了形には PERFECTIVE の意味機能がないのに、オランダ語の現在完了形にはあるのか。
- (ii) なぜ現在完了形の「継続用法」は生じたのか。
- (iii) なぜ英語の現在完了形は一旦 PERFECTIVE の意味段階を表すようになっていたのに、現代において ANTERIOR (PERFECT) の意味段階に逆行したのか。
- (iv) なぜオランダ語の単純現在形は英語の現在完了形の「継続用法」に相当する意味機能をもつのに、現代英語の単純現在形はもたないのか。
- (v) なぜ過去完了形・非定形の完了形は、PERFECTIVE に対応する意味機能をもつのか。
- (vi) なぜ現代英語の単純現在形の未来時指示は、オランダ語に比べて制限が厳しいのか。

英語とオランダ語の現在時をその時間構造内に含む時制形式、特に、現在完了形と単純現在形に関する限りにおいては、C・牽引の度合いの差異は、以下のように図式化される。

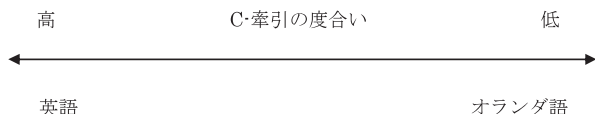


図 15：英蘭語の「意味範囲の C・牽引」の度合い（相対的な差異）

最後に、C・牽引が英語やオランダ語などの西欧言語において発動する意味合いについて、少し触れておく。廣瀬の一連の研究 (Hirose 2000, 廣瀬 & 長谷川 2010, など) では、英語は「公的自己中心言語」であると特徴付けられている。「公的自己」とは、聞き手と対峙する話者の側面であり、言語伝達行為を行う時の主体的側面である。(これは、聞き手の存在を前提としない、言

語による思考活動を行う時の主体的側面である「私的自己」と対を成す概念である。)したがって、「公的自己中心言語」は、聞き手の存在を前提としていることを同わせるような言語的特徴を多くもつ。和田(2008)は、英語以外の西欧言語(ドイツ語・オランダ語・フランス語・スペイン語・スウェーデン語)も公的自己中心言語として特徴付けられるとし、これらの言語における法・時制現象に差異が見られることを「公的自己中心性」という概念を用いて説明しようと試みている。そこでは、「公的自己中心性」は程度概念で、高度に公的自己中心的な言語からそうでない言語まで存在すると主張されている。

この「公的自己中心性」の違いを引き起こしているのが、C-牽引の度合いの違いである。(西欧言語においては)本稿の枠組みでいうところの話者の意識は、公的自己の意識ということになるからである。そして、C-牽引度が高ければ高いほど「現在時の磁場」は強いことを意味しており、その結果、公的自己中心性が強くなると考えられている。これは、任意の時制形式の意味範囲が発話時を含む時間帯に限定(収束)していくということは、絶対的定点である発話時を含む以上、聞き手にとっては言及時間帯を特定化するのは容易ということになるだけでなく、現在時をその意味範囲にもつ時制形式(単純現在形や現在完了形など)の言及時間帯の現在時への限定化に伴い、過去形や「will+不定詞」形の言及時間帯との差異化にもつながるので、ある意味で、聞き手の立場に立った(聞き手がその時間値を解釈しやすい)時間構造の体系を発達させることにつながるからである。この点については、また稿を改めて詳しく論じたい。

## 注

\*本稿は、筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻平成22年度第1回言語学コロキウムで発表した内容に、加筆・修正を加えたものである。本稿の作成に当たり、廣瀬幸生先生と大矢俊明氏ならびに査読委員の渡邊淳也氏から貴重なコメントをいただいた。また、Bert Cappelle 氏にはオランダ語のインフォーマントとして忍耐強く質問に答えていただいた。記して感謝の意を表したい。なお、本稿は、2010年度科学研究費補助金「談話のタイプと文法に関する日英語対照言語学的研究」(課題番号19320070)、「日英語ならびに西欧諸語における時制の比較研究」(課題番号19520414)、「時制とその周辺領域の発展的研究」(課題番号20520441)の補助を受けている研究成果の一部である。

- 1 Bybee, Perkins & Pagliuca (1994: 63) 自身は、現代英語の RESULTATIVE の意味機能は、(i)に見られるような「be+過去分詞」構文によって表されると述べている。

- (i) a. He is gone.
- b. The door is closed.

しかしながら、①比較対象言語であるオランダ語では RESULTATIVE の意味機能と ANTERIOR (PERFECT) の意味機能（ならびに PERFECTIVE の意味機能）が同じ「hebben ‘have’+ 目的語+過去分詞」の構造（枠構造）で表されていること、②現代英語において ANTERIOR (PERFECT) を表す現在完了形の祖先是、古英語においてはオランダ語と同じく枠構造で表されており、初めは RESULTATIVE の意味機能しかもたなかったのが ANTERIOR (PERFECT) の意味機能を表すようになっていったこと（cf. Traugott 1972: 93-94）、を考慮して、他動詞文の場合の他の意味機能との関連性を見る便宜上、ここでは「have+目的語+過去分詞」という枠構造を英語の RESULTATIVE の意味段階を表す構造として提示している。（実際、(2a) の解釈が示すように、現代英語においてもこの枠構造で RESULTATIVE の読みを表すことは可能である。）以下、本文中で（他動詞文の場合の）英語の RESULTATIVE について論じる場合は、「have+目的語+過去分詞」の枠構造を使っていることに注意されたい。

- 2 任意の現在完了形が特定の過去時を指す表現と共起することを以って、その現在完了形が PERFECTIVE の意味段階に達しているとは言えないという考え方もあるかもしれない。事実、Boogaart (1999) もそのように考えているようである（この点については、5 節も参照）。しかしながら、本稿では、RESULTATIVE, ANTERIOR (PERFECT), PERFECTIVE の定義は Bybee, Perkins & Pagliuca (1994) のものに従っているということを強調しておきたい。

彼らは ANTERIOR (PERFECT) の定義として、“an anterior signals that the situation occurs prior to reference time and is relevant to the situation at reference time” (p.54) と述べる一方、PERFECTIVE の定義として、“Perfectives signal that the situation is viewed as bounded temporally” (p.54) と述べ、“It is thus often used to refer to situations that occurred in the past” (p.54) と加えている。その上で、“The English Perfect is a good example of an anterior” (p.61) とし、“…the goal of the utterance [=the utterance of an anterior] is not to locate a situation at some definite point in the past, but only to offer it as relevant to the current moment” (pp.61-62) と述べ、その証拠として英語の現在完了形と特定の過去時を表す表現が共起しないことを挙げている。

- (i) a. ?Carol has taken statics last semester.
- b. ?I’ve gone to the bank at nine o’clock this morning.

これらの記述から、Bybee, Perkins & Pagliuca (1994) の枠組みでは、特定の過去時を指す表現と共起する現在完了形（例えば、オランダ語の現在完了形）は PERFECTIVE の意味段階に達していることになる。彼らの枠組みにおいてオランダ語の現在完了形が PERFECTIVE の段階に達していることは、“This change [=the change from anterior to past or perfective] is well documented around the world, occurring or having occurred in Indo-European languages such as French, Italian, Rumanian, German and Dutch” (p.81) という記述からも伺える。

- 3 この2種類の C-牽引の区別を明確に行って、英語・ドイツ語・オランダ語・フランス語・スペイン語・スウェーデン語の法・時制現象の相違を説明しようとした試みに、和田 (2008) がある。

- 4 本稿でいう言語環境には、統語環境やレジスター、談話のタイプなどが含まれる。
- 5 英語やオランダ語の定形動詞は、すべての人称・数・時制において異なる屈折辞をもつわけではない。特に、英語の場合、規則変化動詞では、原則として3人称・単数・現在形を示す -s 以外は明示的な屈折辞をもたない。しかしながら、これらの言語においてそういった文法的直示概念が反映していることは明らかなので、本稿では非明示的な場合も、人称・数・時制が一体化した屈折辞が存在すると仮定する。
- 6 Shetter & Van der Cruysse-van Antwerpen (2002: 111-112) によると、オランダ語で完了の助動詞が zijn 'be' になるのは、①場所変化や状態変化を表す自動詞、②具体的な移動手段を表す動詞、③ blijven 'stay' や zijn 'be' などの強変化動詞、を過去分詞にとる場合である。
- 7 英語の過去分詞が最終的な時制解釈値として「先行性」を表さない場合（例えば、受動態の場合）もあるが、その解釈メカニズムについては、和田（2006）を参照。
- 8 Bert Cappelle 氏（個人談話）によると、(15b) は文法的ではあるが、少し座りが悪いようである。その理由として、(i) のように言う方がより自然であるからではないかと述べている。
  - (i) Yoko {is/zit} in het buitenland.  
'Yoko is abroad.'
 一種のプロッキングが働いていると言えるかもしれない。しかし、(15b) 自体の容認性には問題がないので、ここではそのまま用いることにする。
- 9 注1で見たように、Bybee, Perkins & Pagliuca (1994) の考える、現代英語の RESULTATIVE の意味機能を表す形式は「be+ 過去分詞」構文であるが、この構文の時間構造も図4で表される。例えば、He is gone の場合、is が E1 を、gone が E2 を表し、「彼なる人物がどこかへ行ってしまった結果状態が発話時において当てはまっている」ことを意味するので、自動詞・他動詞の違い以外は (2a) のような「have+ 目的語+ 過去分詞」構文と同じ時間構造をもつと言える。
- 10 この前景部分は、Langacker (1991) のいうプロファイル (profile) に相当すると言える。
- 11 Wada (2002) は、時間構造の中の前景化される部分の違いで以って、英語とドイツ語の現在完了形が特定の過去時を指す表現との共起性に関して異なる振舞いをするを説明した。それを受けて、和田 (2005) は、C-牽引を導入することでこの点にも同様の動機付けが与えられると述べている。また、和田 (2005) では、間接話法補部内の時制現象をはじめ、独立節での現在完了形や現在進行形、単純現在形による未来時指示などに関する時制現象において英独語で差異が生じることに対して、C-牽引に基づいた統一的な説明が初めて試みられている。
- 12 3節で見た現在完了形の基本図式（図3）は「完了・結果用法」のものであり、RESULTATIVE の意味段階（図4）から ANTERIOR (PERFECT) の意味段階（図5）へ変遷した際の最初の時間図式である。これは、意味が変遷して行く際には徐々に変化していくのが通例であると考えると、ANTERIOR (PERFECT) の段階の「完了・結果用法」と RESULTATIVE の段階には、①状態変化・場所変化を表すタイプの述語の場合が基本であること、②過去分詞の表す状況が引き起こす特定の状態を表す、という共通点があることから動機付けられる。したがって、ANTERIOR (PERFECT) の段階の現在完了形の時間構造の基本形はあくまで過去時と現在時に各々出来事時が独立して存在するスキーマをも



つもの(図3や図5)ということになり、「継続用法」の場合、C-牽引という要因が2つの独立した出来事時の融合を引き起こしたとする説明は、概念的にも通時の事実からも正当化されうる。

- 13 大矢俊明氏(個人談話)から、本稿の分析では(i)が容認可能であることを説明できないのではないかとのご指摘をいただいた。

(i) Ik woon nu tien jaar in Tsukuba.

‘(Lit.) I live in Tsukuba for ten years now.’

4.3節において、オランダ語の現在完了形の場合、nu ‘now’という現在時を明示的に示す言葉の力を借りることで「現在時の磁場」へ引き寄せる力が高くなるという趣旨の説明をしているので、(i)の場合もnu ‘now’が存在するために「現在時の磁場」のバリアとしての力が強くなり、その結果、図10が示すように出来事時Eが過去時へ拡張せず、したがって、「継続」読みを許さないという説明になるのではないかと、という指摘である。

これに対して、現在のところ決定的な解決策はない。ただ、この点について、Bert Cappelle氏(個人談話)は、(i)はal ‘already’をつけて(ii)のようにするほうがかなり良い(much better)と指摘している。

(ii) Ik woon nu al tien jaar in Tsukuba.

‘(Lit.) I already live in Tsukuba for ten years now.’

Michaelis (1992)によると、alreadyは意味構造的に「alreadyが表す時点の状態だけでなく、その状態も含めた、それに先行する時間帯」を表すという。この立場を採用すると、alreadyのオランダ語版であるalもこの意味構造をもつと仮定できるので、大矢氏の指摘に対して何らかの回答を与えることができるかもしれない。すなわち、(i)自体はnu ‘now’の存在により基本的には「現在時の磁場」の力が強くなり、その結果、容認性は低いが、al ‘already’の意味構造的力を借りることでそのような過去時への拡張の解釈が容易になるという説明が可能となるからである。この立場に立つと、(i)のままで容認する話者は、(ii)のようにal ‘already’を読み込んで解釈していると言える。この問題に対する詳しい解決案は今後の課題としたい。

- 14 例えば、古英語では、現代英語では現在完了形を使うところを単純現在形を使っていた(Traugott 1992: 187; cf. Elsness 1997: 247)。そのことを示す例が(i)である(二重下線は筆者による)。

(i) Efne min wif is for manegum wintrum untrum

Indeed my wife is for many winters sick

‘Indeed my wife has been sick for many years.’

なお、この使い方は1900年ごろまで生き延びたという報告もある(cf. Boogaart 1999: 150)。

- 15 Bert Cappelle氏(個人談話)によると、オランダ語(フラマン語)のmogen ‘may’には推量の意味がないとのことなので、理論的可能性を表すkan ‘can’を用いてある。

- 16 この分析は、いわゆる上昇構文(Raising Construction)内に生じる完了形が、「過去時制相当」用法を表すことも、統一的な観点から説明できる。

(i) a. Tom seems to have arrived yesterday.

b. Jan {lijkt/schijnt} gisteren aangekomen te zijn.

‘Jan {seems/appears} to have arrived yesterday.’

この場合、本文中の図 12 の E1 が上昇動詞 (seem や lijken ‘seem’/schijnen ‘appear’) の出来事時に代わるだけである。なお、上昇動詞と不定詞である完了の助動詞が時制ユニットを形成しない根拠としては、後者が前者の補部位置に生じていない、すなわち、両者は独立性が高い (そもそも合体していない)、ということが挙げられる。これを支える言語事実として、形式主語と that/dat 節を使って書き換えることができるという事実を挙げることができる。

(ii) a. It seems that Tom arrived yesterday.

b. Het lijkt erop/schijnt dat Jan gisteren is aangekomen.

‘It {would seem/would appear} that Jan arrived yesterday.’

- 17 これは、4.5 節で単純現在形の表す出来事時が過去時へ拡張することができるか否かを考察した以上、当然出てくる疑問点である。
- 18 われわれの枠組みでは、この「断定」はモダリティの一種と捉える。定義については、Wada (2001, 2002, to appear) を参照のこと。
- 19 中英語においては、まだ、単純現在形が未来時を指すのに定期的に使われていたという (cf. Fischer 1992: 241)。ただし、「will+ 不定詞」形に相当する形式も増えてきていたということである (cf. Traugott 1972: 114)。

## 参考文献

- Boogaart, Ronny (1999) *Aspect and Temporal Ordering: A Contrastive Analysis of Dutch and English*. The Hague: Holland Academic Graphics.
- Bybee, Joan, Revere Perkins, and William Pagliuca (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Carey, Kathleen (1995) “Subjectification and the Development of the English Perfect,” *Subjectivity and Subjectification*, ed. by Stein Dieter and Susan Wright, 83-102. Cambridge: Cambridge University Press.
- Carey, Kathleen (1996) “From Resultativity to Current Relevance: Evidence from the History of English and Modern Castilian Spanish,” *Conceptual Structure, Discourse and Language*, ed. by Adele E. Goldberg, 31-48. Stanford: CSLI Publications.
- Comrie, Bernard (1985) *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Elsness, Johan (1997) *The Perfect and the Preterite in Contemporary and Earlier English*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Fischer, Olga (1992) “Syntax,” *The Cambridge History of the English Language* Volume II: 1066—1476, ed. by Norman Blake, 207-408. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hirose, Yukio (2000) “Public and Private Self as Two Aspects of the Speaker: A Contrastive Study of Japanese and English,” *Journal of Pragmatics* 32, 1623-1656.
- 廣瀬幸生・長谷川葉子 (2010) 『日本語から見た日本人—主体性の言語学—』。東京：開拓社。
- Janssen, Theo (1994) “Tense in Dutch: Eight ‘Tenses’ or Two Tenses?” *Tense Systems in European Languages*, ed. by Rolf Thieroff and Joachim Ballweg, 93-118. Tübingen: Max Niemeyer.



- Janssen, Theo (1996) "Tense in Reported Speech and Its Frame of Reference," *Reported Speech*, ed. by Theo A.J.M. Janssen and Wim van der Wurff, 237-259. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Lakoff, George (1996) "Sorry, I'm Not Myself Today: The Metaphor System for Conceptualizing the Self," *Spaces, Worlds, and Grammar*, ed. by Gilles Fauconnier and Eve Sweetser, 91-123. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Lakoff, George, and Mark Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.
- Langacker, Ronald (1991) *Foundations of Cognitive Grammar Volume II: Descriptive Applications*. Stanford: Stanford University Press.
- Leech, Geoffrey (1987/2004) *Meaning and the English Verb*, 2<sup>nd</sup>./3<sup>rd</sup>. Edition. London: Longman.
- Michaelis, Laura A. (1992) "Aspect and the Semantics-Pragmatics Interface: The Case of *Already*," *Lingua* 87, 321-339.
- 中右 実 (1994) 『認知意味論の原理』. 東京: 大修館書店.
- Nedjalkov, Vladimir P. and Sergej Je. Jaxontov (1988) "The Typology of Resultative Constructions," *Typology of Resultative Constructions* ed. by Vladimir P. Nedjalkov, 3-62. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Shetter, William Z. and Inge van der Cruysee-van Antwerpen (2002) *Dutch: An Essential Grammar*, Eighth Edition. London and New York: Routledge.
- Traugott, Elizabeth C. (1972) *A History of English Syntax: A Transformational Approach to the History of English Sentence Structure*. New York: Holt, Reinhart and Winston.
- Traugott, Elizabeth C. (1992) "Syntax," *The Cambridge History of the English Language Volume I: The Beginnings to 1066*, ed. by Richard M. Hogg, 168-289. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wada, Naoaki (2001) *Interpreting English Tenses: A Compositional Approach*. Tokyo: Kaitakusha.
- Wada, Naoaki (2002) "A Comparative Study of the English Present Perfect and the German Perfekt: With Special Reference to Their Differences in Co-occurrence with Adverbials Referring to a Definite Time," *English Linguistics* 19-2, 335-365.
- 和田尚明 (2005) 「C・牽引と公的自己中心性の度合い」『茨城大学人文学部紀要(コミュニケーション学科論集)』17, 113-138.
- 和田尚明 (2006) 「過去分詞形の時制解釈のメカニズム」『文藝言語研究一言語篇』50, 85-128.
- 和田尚明 (2008) 「公的自己中心性の度合いと西欧諸語の法・時制現象の相違」森雄一・西村義樹・山田 進・米山三明 (編) 『ことばのダイナミズム』, 277-294. 東京: くろしお出版.
- 和田尚明 (2009) 「「内」の視点・「外」の視点と時制現象－日英語対照研究－」坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明 (編) 『「内」と「外」の言語学』, 249-295. 東京: 開拓社.
- Wada, Naoaki (to appear) "On the Mechanism of Temporal Interpretation of *Will*-Sentences", *Tsukuba English Studies* 29, University of Tsukuba.